

平成 5 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 福山 幸夫 先生

福山幸夫教授は 1952 年東京大学医学部を卒業され、1953 年同大学小児科学教室に入局後我国における小児神経学の開拓者としてその発展を強力に推進された。1961 年には小児臨床神経学研究会を設立され、これが今日の日本小児神経学会に発展したのである。

福山教授はその研究の初期から、てんかんにつよい関心を向けられ、学位論文となった「點頭てんかん(乳幼児前屈型小発作)の発作像について」(神経研究の進歩 4 巻 1 号、1959)「乳幼児前屈型小発作」の発病原因並びに本態について」(神経研究の進歩 4 巻 4 号、1960)は我国における West 症候群の本格的研究の嚆矢となった大著であり、「乳幼児前屈型小発作に対する ACTH 療法」(脳と神経 12 巻 3 号、1963)とともに黎明期の我国の小児てんかん学に及ぼした刺激と影響ははかりしれないものがある。

その後も広い小児神経学への関心の中で、てんかん研究に対しては常に特別の努力を傾注され、1978 年、第 19 回日本小児神経学会総会では、会長講演として「小児てんかんの治療法の再検討と新開発の試み」をとりあげ、3453 例の膨大な資料をもとに予後を含め、この時代の我国の小児てんかん学の実態を余すところなく示されると共に小児てんかん診療の規範を提示された。

1975 年には会頭として第 9 回日本てんかん研究会を開催されたが、それまでの限定会員制を広く自由参加の形式に変え、今日の日本てんかん学会に発展する端緒を作られている。

福山教授が常に時代を超えた先見性をもって指導に当たられたこと、特に早くから国際化を志向されたことも特筆される。1969 年には日本小児神経学会の機関紙として「脳と発達」を創刊し、心血を注いで小児神経学、小児てんかん学領域の最も有力な雑誌の一つに育成されるとともに、1979 年には英断をもって"Brain and Development"を創刊されたが、幾多の困難を乗り越えて今日国際的にも最高レベルの専門誌とみなされるに至っている。これらの雑誌にはてんかんに関する多くの優秀な論文が掲載されており、特に後者は我国のてんかん学の業績の国際的窓口になっていることは比類なき貢献と考えられる。

東大小児科から東京女子医大教授時代のほぼ 40 年間に極めて多くのてんかん患児の専門的診療に当たられ、新しい診断と治療の開発に大きな成果をあげられた。教育に関しても多数のすぐれた門下を育成された功績は大きく、これらの方々が高度の小児てんかん診療に広く活躍されている。先生の御人柄は親しみ易く、所属を異にする後進にもかかわらぬ温かい指導を与えられたのである。また、早くからてんかん患者の社会的処遇、社会啓発にも深い関心をよせられ現在のてんかん協会の前身として 1973 年「小児てんかんの子供をもつ親の会」の結成を援助されたことも特筆される。以上のように福山教授のてんかん研究並びにてんかん医療に関する永年の御貢献は真に偉大であり、今日の日本小児てんかん学

の礎石を築かれた功績は不滅のものである。

岡山大学医学部教授
大田原 俊輔